

地域の人から愛されてこそ

「中・高校生が楽器を続けられる受け皿となり得る楽団になりたい」と語る井手上剛志さん



楽団四季「Jolly forest Jazz orchestra」

い で がみ たけ し
井手上剛志さん

みの〜れと共に生活するスタイル
Minole Life
のすすめ

No.06

小・中学の楽器演奏活動が盛んな美野里地区において、高校生以上の楽器演奏活動の受け皿として設立し、先日四周年を迎えた楽団「ジョリーフォレストジャズオーケストラ（以下JJJ）」。そのJJJでトランペットを吹く井手上剛志さんは、金管パートのリーダーを務め、練習を仕切るリーダーでもある。柔和な表情の中に、しっかりとした芯を感じる青年。新潟県出身。

技術の前に 心が大事

楽器ができるってカッコいい。ヒーローに憧れる雪国の少年は、小学校の鼓笛隊で太鼓を、中・高校では吹奏楽部でホルンを担当。大学ではロックバンドのベースを経験。音楽に囲まれて育ったが、就職後は多忙ゆえに音楽から離れた。そのうち茨城へ異動。あるときカラオケで「音楽で人を楽しませる感覚がよみがえってきた」。音楽がやりたくてやりたくて仕方がない。楽器が吹ける場を求め、JJJに出逢った。それから生活が一変。会社の昼休みに車の中で楽器の練習をする毎日。楽器を吹ける喜びを噛み締めつつ、一〇年のブランクを必死に取り戻す。音楽に囲まれる日々が戻ってきた。

「メンバーはみな、『音楽が好き』という強い想いがある」と信じてます。練習するものが楽しみで仕方がないから、各自忙しい時間をやりくりしてやって来る。でも、僕がJJJに入った頃はそうではなかった」と三年前を振り返る。演奏技術と音のレベル追求が先行し、即戦力の経験者のみをメンバーに入れていた。「苦勞もたくさんあったと聞いています。渦中の人たちの努力は大変なものだったと思います」と前置きしながらも、「『みの〜れと共に生きる楽団』というコンセプトとかなりズレているんじゃないかと段々に思い始めました」。リーダーという立場にならな一年。「僕は、みの〜れの団体としてのポジションを意識しました。地域の人たちから愛されてこそその楽団。自分たちがここで楽器ができるのはなぜか、そういう環境を創ってくれている存在に気づくことで、おのづかしくと使命もメンバーで共有できつつあると思います」。信条は、「技術の前に心が大事」。うまいヘタよりも、メンバー同士の気持ちを含めてお客さんに楽しんでもらおうとする心が大切。それが、お客さんから愛される楽団になることにつながる。と確信している。以前と明らかに観客の反応が違うから。二年前から比べると、うまい人が抜けたこともあつて演奏技術レベルは下がったかもしれない。でも、お客さんの反応は以前よりも明らかにいい。うまくななくても『まとまつての』《楽しそうだ》《自分もやってみたいかな》という声をたくさんかけてもらえるようになった。これを求めてたんだと思った。人とのつながりを意識するようになってから、人の心を揺さぶる音楽の力に気づいた。父親の世代から襲って来ていることが特に嬉しいという。ジャズと絵を愛する父の影響を受け、音楽を始めたからだ。その父を、昨年亡くした。「JJJを始めたことをとても喜んでくれていた。一度、観せたかったな」